

◆特集 情報収集・活用術◆

## 私の情報収集・活用術

平野 美樹子

### I. グローバル化の中での情報処理能力

近年、情報関連技術の急速な発達の中で、様々な分野においてグローバル化が進んでいる。巨大なホストコンピュータを用いなくとも、家庭にあるパソコンのネットワークを活用して、医薬品の開発をも飛躍的に進められるような時代となってきている。情報化が進み、量・質ともに様々な情報を、瞬時に入手することが可能になったが、これは一方で必要な情報を取捨選択して活用するという新たな能力——いわゆる「メディア・リテラシー」を私たちに求めることとなった。

ただ、それに至る以前に、人によって情報へのアクセスに格差があるという問題が存在している。このデジタル・ディバイド(Digital divide: 情報格差)は、発展途上国で顕著な問題となっている。これは情報にアクセスできる者とできない者の間に、富の再分配に格差(貧富の差)を生じるといえるものである。ただ、この問題は発展途上国のみでなく、我々のごく身近にも存在する。

### II. 情報活用を促進する図書館および司書の役割

情報技術の発達した今、依然として図書館は重要な役割を果たしている。有史以来これまで人類が蓄積してきた膨大なデータは、いまだ書

物の中に存在するからである。夥しいデータの中から、自分に必要なものを選び出したとしても、実際必要となる文献の入手において、個々人の努力では物理的・時間的に自ずと限界がある。そこで私は、図書館をフルに活用している。様々な図書館とつながりを持ち、所蔵情報を常にシェアし相互協力を行っている図書館は、私にとって欠かせないパートナーである。病院図書室では私の業務に関わる文献の手配を、大学図書館には研究に関わる文献の手配を、そして市立図書館では新刊書の購入依頼および絶版となった本に関しては相互貸借を利用して本を閲覧するようにしている。

ここでいつも親身になって関わってくれるのが、司書の方々である。和洋雑誌を問わず、メジャーでない文献であっても、あの手この手を使いいずこからか入手し、また期限を迫られる場合も迅速に手配してくださる。司書が「情報専門職」といわれる所以を、その果たす役割から窺いしることができるのである。

一方で、私にとって本来最も身近な看護専門学校図書室は、グローバル化の流れから取り残されているように思える。

### III. 赤十字における学校図書室の現状と課題

図書館情報学が学問的な確立を遂げ、情報化社会の中でその重要性を認識される中で、看護専門学校図書室(以下、学校図書室)の整備と活用は一向に進んでいない。学校図書室の現状はどうであろうか。図書室に関するアンケート調査を、全国 36 施設ある赤十字看護専門学校(33

HIRANO Mikiko

長岡赤十字看護専門学校 専任教師

miki@nagaoka.jrc.or.jp

校)および助産婦学校(2校)の教員が一同に会した教員研修会で実施した。

回答をいただいた33施設のうち、臨時を含めて司書を配置しているのは、わずか6校にとどまった。その司書に代わる図書購入・分類の担い手は、看護教員もしくは事務である(図1)。看護教員においては図書にまつわる膨大な作業が、本来の業務とは別に課されていることが推察される。「機会費用」という経済学用語がある。これは本来、「子どもの養育によって、母親が就業機会を犠牲にすることによって生じる間接的費用」をいう。教員が専門でない図書管理に手を取られることは、その分その教員の教育に資する機会を犠牲にすること——すなわち「機会費用」が生じていることを意味する。学生の資質が変化し、以前にも増して看護学生の教育に多くの力が必要とされる今、看護教員の図書管理にかける間接的費用が、本来の使命である教育への直接的費用を上回るほどの効果を生むのかは極めて大きな疑問である。実際アンケートの中では、図書をめぐる膨大な作業が、教員にとって大きな負担となっているという声が少なくない。また図書の分類をめぐっても、図書担当になる教員により、分類方法に違いをみるという弊害も生じてきている。伝統的に続いてきた専任教師の自己犠牲的献身に頼るのではなく、図書管理においては専門職である司書の配置が求められる。

また Feather(1994)は、当面する課題や仕事をこなすのに必要な情報を持っている組織や個人を「情報リッチ」、それとは反対にその種の情報を持っていないものを「情報プアー」と定義づけた。看護学校における図書購入においてはその即時的効果への期待から、医学・看護系図書に偏る傾向にある。この傾向は、医療・看護系に関して「情報リッチ」となる一方で、他の分野に関しては「情報プアー」となり易いという側面を持つ。「情報プアー」が新たな状況へ適応する力を減じることを鑑みると、看護・医療を取り巻く状況が刻々と変化する中で、他分野への「情報プ

アー」は、目に見えないデジタル・ディバイド(Digital divide:情報格差)を看護学校にもたらしていると考えられる。司書の配置とともに、各学校における図書室の弱点を踏まえ、多角的な情報を得られるよう、その補完的システムとしての他図書室・図書館とのネットワークが確立されることが望まれる。

加えて、活用を効果的に進めるために、基礎教育の段階で「図書館・情報学」などの講義を取り入れることで、学生に必要な情報へ効率的にアクセスするための方法を学ばせる必要がある。また図書の配置に関しては、レファレンスなどを充実させ、利用しやすいシステムをつくるなど、さらなる図書環境の整備も課題となる。

#### IV. 図書環境整備に対する投資効果

「看護における研究は臨床に始まり、臨床に戻る」といわれるように、人間関係を基盤とする看護学の発展は、大学を中心とした研究機関のみでなく、臨床の場で行われる研究が支えている。そして看護者が、実践における研究を積み重ねることは、「看護を受ける人」の快適性をより高める。さらに長期的視野に立つと、看護研究を通して「看護を受ける人」にとっての利益を探究することは、選ばれる病院としての素地を形作り、結果的に病院の利益にもかなう。今現在、看護学校は各病院の付帯事業となっており、多くの学生がその病院に就職している。その意味で、病院が学校図書室に投資することは、将来を予測した「先行投資」ともいえる。

今や企業・大学は「産学連携」を行い、大学での研究成果をそのまま企業で生かすことが試みられ、実際に成果を生んでいる。臨床・学校における「臨学連携」は、「少ない投資で、最大の利益」の達成に寄与すると考える。最大限の投資効果を達成するためには、図書環境の整備とともに、看護教員が研究へのコミットメントを深められるよう、煩雑な業務内容の整理や更なるキャリア開発を含めた人的な環境整備も不可欠となろう。

# 参考文献

- 1) 利夫.開発経済学入門.東京:東洋経済新聞社;2001
- 2) Feather,J.:高山正也・古賀節子訳.情報社

会をひらくー歴史・経済・政治ー.東京:勁草書房; 1997

- 3) 大野健一.途上国のグローバリゼーション.東京:東洋経済新聞社;2000

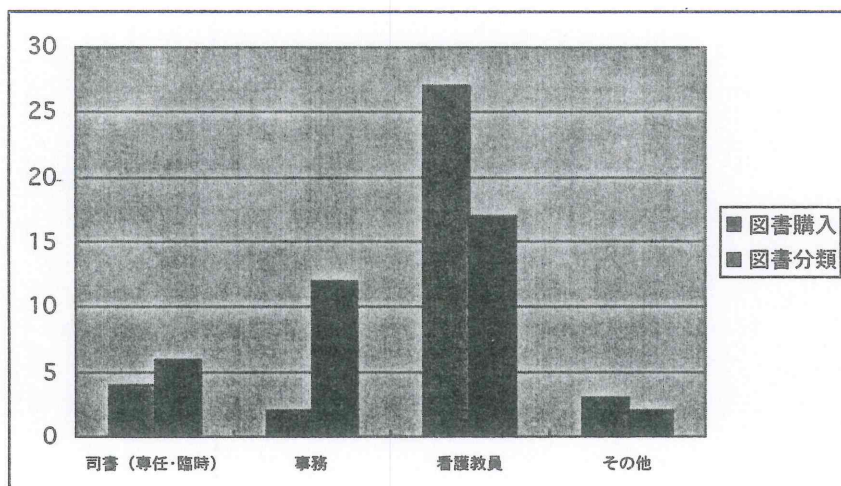


図1 図書館管理の担い手 (重複回答)